



電線製造黎明期の専門メーカー 山田電線製造所

- 住所
神奈川県横浜市金港町5丁目
- 交通アクセス
JR横浜駅 きた東口 200 m

■山田電線製造所

山田電線製造所は、わが国の電線製造の黎明期における専門メーカーとして、電線業界の発展に大きく貢献しました。現・古河電気工業株式会社のルーツの一つ*でもあります。

明治17年(1884)、発明家の山田与七により、横浜市高島町9丁目19番地(現、神奈川区金港町5丁目)に設けられました。

これは、東京～横浜間に電信線を架設し公衆電信サービスが開始された明治2年(1869)から15年後、東京電燈が架空配電線による電燈供給を始める明治20年(1887)の3年前でした。

*古河電気工業株式会社の創業100年史(1991出版)によれば、「明治17年(1884)、古河市兵衛は本所鋸銅所を開設し銅の精錬開始。同年、山田与七は山田電線製造所を開設し木綿被覆電線を製造。当社の母体誕生、当社事業発祥のため、当年を当社創業の年とする」と述べられています。本稿では、後者の山田与七の山田電線製造所について記述しています。

■当時の地図での場所

図2は、与七が山田電線製造所を設けた年の2年前、明治15年(1882)測量、24年再版の2万分の1地形図(迅速図)です。同製造所があった高島町9丁目は、「山田電線製造所」と追記した赤丸



図2 明治15年(1882)測量の地形図
国土地理院発行の2万分の1地形図(横浜区)を使用

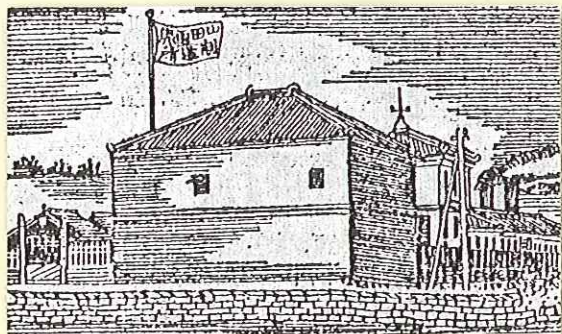


図1 明治17年頃の山田電線製造所
〔電気之友〕昭7.9.1号
国立国会図書館マイクロフィルムより転載

印のところで、月見橋の直ぐ北側*になります。

*高島町9丁目の詳細位置は図4参照

ここから下側には、土地と鉄道などが横浜湾と平沼の間を弓なりに走っていますが、これは、わが国初の鉄道(新橋～横浜間、明治5年開通)を建設するため、海を埋め立て整備したものです。

■現在の状況

明治時代の地図(図2)を参考に、現在の地図(図3)において山田電線製造所の位置を追うと、平沼と横浜湾のほとんどが埋め立てられ様相が一変していますが、鉄道線路と月見橋に注目するこ



図3 現在の地形図
国土地理院発行の2万5千分の1地形図を使用

図4
高島町9丁目
横浜実測図
明治14年

横浜市立
中央図書館蔵



とで、山田電線製造所跡と記した赤丸印のところになります。

現地を訪ねたところ、山田電線製造所跡と思われるところは「東興ビル」などが建っており、住所は神奈川区金港町5丁目36番地でした。

なお、辺りを調べてみましたが、当時を偲ぶようなものは見当たりませんでした。



写真1 山田電線製造所跡 海側より撮影

■山田与七と山田電線製造所

山田与七 (1845～1916) は、弘化2年 (1845)、名古屋で生まれ、明治の初めには横浜に近い芝生村 (現・西区浅間町) に住み、横浜に輸入される外国製品の国産化を研究する「発明家」でした。

明治10年 (1877) に開かれた第1回内国勸業博覧会では、香水、香水油、ボイルド油、ペンキ塗の4点を出品し、花紋褒賞を、また、明治14年 (1881) の第2回内国勸業博覧会では、護謨 (ゴム) 線3品などで褒状を受けました。

明治17年 (1884)*、与七は、新橋～横浜間の鉄道駅の一つ神奈川駅に近く、鉄道の便がよく水運も利用できる前述の高島町9丁目に、約300坪 (1000m²) の土地を借地し、山田電線製造所を創立しました。創設時の建物規模は明らかではありませんが、図1のような絵が残されています。

*創立時期については、日本電気協会30年史 (昭和28年発行) では明治14年、この他にも明治16～17年と記述されている資料もありますが、ここでは、古河電気工業株式会社創業100年史に記述されている明治17年としました。

■当時の電気機器類製造業界

山田電線製造所が創立した明治10年代と20年代は、多くの電気機器・電線類の製造会社が創立され、日本の電気産業の黎明期でした。

電気機器類では、明治14年 (1881) に沖牙太郎が明工舎を、翌年に田中久重 (2代目) が田中製造所を、翌々年に三吉正一が三吉工場を創立しています。電線類では、明治16年に山田与七が木綿巻電線を、翌々年に藤倉善八が絹綿巻電線を、津田幸兵衛が木綿巻電線とコードを、三吉正一が木綿巻電線の製造を開始しています。

ところで、当初は電線も製造していた明工舎や三吉工場は、後に、発電機、電動機、電信電話機などの機器製造に専門化していきませんが、山田電線製造所は名前のとおり、電線製造に特化し専門メーカーとして成長していきます。

■山田電線製造所のその後

大学教授の志田林太郎などの技術指導も仰ぎながら技術改良を進め、明治23年 (1890) の第3回内国勸業博覧会では、再製ゴムによるゴム電線を出品し有効三等賞を受賞しました。また、同25年と26年には、紙絶縁電線などの専売特許を取得しました。

明治29年 (1896)、横浜の有力商人の出資を得て、横浜電線製造株式会社として新たに発足しました。この年には、第1次電話事業拡張計画実施と、高压用架空線のゴム絶縁化規制などがあり、通信線と電力線の需要拡大が見込まれました。

明治35年 (1902)、横浜市裏高島町に新工場を建設するとともに本店も移転しました。(図5参照)

大正9年 (1920)、原料の銅の購入先であり、古河鋳業の所属工場である日光電気精銅所と合併し、古河電気工業株式会社となり、現在に至っています。



図5 裏高島町の工場跡 (赤丸印、現在は研究所) 移転後、工場を南側へ拡張、S61年に千葉県と三重県へ移転、跡地は住宅展示場とサッカー場になり、現在、サッカー場は有料ガーデンになっています。